
鏡の中で

唯

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

鏡の中で

【Nコード】

N7648B

【作者名】

唯

【あらすじ】

とある散髪屋に入った1人の青年。中には若い女店員が1人だけ。「後ろの辺切ってください」「分かりました」。。

「いらつしゃいませ」

元気な女店員の声が店内に響く。今は彼女1人だけのようだ。
声と同時に入ってきたのは少し髪の長い青年、くらのよしかず倉野良和だ。

「カットとシャンプーお願いします」

「あ、はい。じゃあそちらに座って待っててくださいねー」

店員は横にあるソファを指した。言われた通り、良和は隣に置いてある黒いソファに腰を下ろす。ソファの柔らかさは、後ろに吸い込まれそうなくらいだった。

しばらくしてから先客が出ていき、店員が良和の方に近付いて行った。

「お待たせしました。あちらにどうぞ」

「はい」

散髪屋の中は主に黒色が使われている。ソファも散發用の椅子も、そして床までも黒だ。

「どんな感じですか？」

「後ろの辺切ってください」

「分かりましたー」

店員がそう言った時、少しだけ目の前がグラついた。

変に思ったものの、店内は先程までと何も変わらない。

店員は良和の髪を洗った後、銀色に光るハサミを出し、髪を切り始めた。

（若いのに上手いな）

良和は鏡に映った店員の顔を見ながら思った。

しかし、不意にチクリと痛みが走る。

「!?!」

「あ、すみません。痛かったですか？」

「いや……」

当たり前だろ、と思いながらも、良和はまた前を向く。だがしばらくしてからまた痛みが走った。

さつきから首の後ろ辺りに痛みが走る。

「あの……」

「はい？」

「痛いんですけど……ハサミ当たってませんか……？」

良和は鏡越しの店員を少しだけ睨んだ。向こうも鏡越しに良和を見てくる。

その顔は、一瞬だけ笑ったように見えた。そしてその笑みの後、またしても目の前が揺れた。

「いえ……？ 当たってませんよ」

店員はそう言ったものの、その後も何度か痛みが走った。

「……いい加減にしろよ！」

とうとう良和は立ち上がった。何度も痛みが走るので、我慢の限界だったのだ。それでいて店員は知らないふりをするばかりなので、更に怒れてくるようだ。

「え？ あの……」

「さつきから何度も何度も当てやがって。さすがにもう白ばっくれねえよな？」

「いえ、何の事ですか……？」

「ふざけんじゃねえよ！ ハサミだよ、ハサミ！」

鏡に映った良和の首の後ろには赤い血が滲み出てきていた。しかし店員は未だに分からない顔をしている。

首の後ろを流れる血を拭くと、良和はそれを見つめた。店員への怒りが込み上げてくるが、ふと不思議な箇所を思い出した。

1度目の痛みが走った時、この店員は確かに「痛かったですか？」と聞いてきた。

故意にやったのだろうか？

だが今の店員は全く分からない顔をしている。

「……どう言う事だ……？」

良和は口の中で呟いた。

それにあの鏡で見た笑いも気になる。

鏡越しに、店員にも良和の血が見えているはずだ。それなのにタオルやティッシュを用意しないのは何故だろうか。

「ティッシュ」

「……え？」

「早くティッシュをくれ」

「………あ、はい」

良和は店員の持ってきたティッシュを取り、首の後ろを流れる血と手に付いた血を拭いた。真っ白なティッシュに付いた真っ赤な血も、店員には分からないようだ。

しかし、彼女が演技をしているようにも見えない。

真っ黒な床と同化している自分の髪を見下ろし、良和は眉をひそ顰めた。

(一体どうなってるんだ……)

床とティッシュとを交互に見ているうちに、また目の前が揺れた。床が回転しているように見える。黒い床に吸い込まれそうだった。

無意識のうちに、良和はまた散髪用の椅子に腰掛けていた。

「……大丈夫、ですか……？」

良和は鏡を見た。店員が心配そうな顔をしている。今度はきつく睨んだ。

鏡の中の店員はさっきと同じ笑みを見せた。不敵に、そして不気味に笑っている。

だが鏡から目をそらし、少し顔を上げて店員を見ると、心配そうな顔で見えているだけだ。口角は上がっていないし、目も細めるところが見開いている。

「………ここは………なんなんだ……？」

「え？」

「鏡の中のアンタは笑ってる……」

「鏡……？」

店員は鏡を見た。不思議そうな顔の彼女が映っているだけだ。

「それにこの血……。これを見てなんとも思わないのか……！？」

良和は、握っていた手の力を緩め、震えながらティッシュを店員の前に突き出した。

「血……って？」

「あるだろ、ここに！」

懸命に伝えようとするが、良和の指した場所を見ても店員は首を傾げるばかりだ。

「……………もういい」

そう言うと、良和は体に被さっていたクロスを脱いで丸め、店員に返した。

「あの……」

「帰る。いくらだ」

「シャンプー代だけで1000円になります……けど、あの……」

店員の言葉に耳も貸さず、良和はカウンターの上に1000円を叩きつけると、ドアを押し開けて出ていった。

店内に残された店員は、ブーツと出入り口を眺めていたが、しばらくするとノロノロと歩き出し、床の上に散乱している髪をほうきで掃き始めた。

良和の言っていた事の意味は全く分からないままだ。

(鏡……)

ふと、彼の言葉を思い出し、鏡を見た。

どこも何も変わらないただの鏡だ。店員の顔も変わらない。首を傾げた後、また下を向いて床を掃き始めた。

鏡の中で、彼女の後ろに置いてある銀色のハサミには、しっかり

鏡の中で

と赤い血が付いていた。

(後書き)

読む人によって受け取り方の違う小説を書きたいと思ってました。作者が最後を決めるのではなく、読者様方がそれぞれ違う最後を決められる。

この小説が、そんな作品になっていれば嬉しいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7648b/>

鏡の中で

2009年7月3日19時03分発行